



# 保戸島の暮らし



津久見港から出航する船旅をしたことがありますか。四浦半島と並行して進む船窓から海と空を眺めていると、25分後にはまぐろ遠洋漁業基地として栄えた保戸島に到着します。昭和34年には3,186人が生活していた保戸島ですが、平成28年には784人と人口減少が浮き彫りになりました。けれど、現在でも楽しく学校生活を送る1人の小学生がいます。島のみなさんの暮らしについてお話を聞きました。

## 島の人の役に立ちたい！ 保戸島が大好きな小学生

津久見市立保戸島小学校4年生の神崎智也くんは、どこにいても活躍な少年です。登下校中に会う人たちからは、「背が伸びたなあ」「元気にしよるんか」と挨拶がたら言葉をかけてもらいます。島で唯一の小学生の成長をみんなが温かく見守っているのです。



智也くんと中谷主税先生の授業風景。学校は保戸島漁港から徒歩で10分ほどの距離にあります。

学び舎には智也くんの登校を待ちわびる教職員がいて、授業や休み時間、給食、掃除など共に過ごす時間を大切にしてくれています。「保戸島が大好きだから、島の人のために立ちたい思いが強いようです」と教えてくれたのは担任の中谷主税先生。智也くんとのようにしたら島に貢献できるか話し合い、総合的な学習の一環として取り組んでいます。4年生に進級してから、小学校の敷地をウォーキングする人の励みになるようにと「けんこうになるお散歩コース」を設定しました。智也くんがインターネットを使って調べたのは、周囲200メートルのグラウンドを20周すると、ご飯茶碗1杯分(約140グラム)のカロリーが消費されるというものです。その内容が書かれた手製の看板がグラウンドの端に立てられました。

## 島を離れた人が帰省する 加茂神社の夏季大祭

「保戸島小学校にだれか来てほしいです」と望む智也くんですが、その顔に寂しさは感じられませんが、放課後や休日には父親の公宏さんとキャッチボールをしたり、家族で遠方に出かけたりします。映画鑑賞や回転寿司に連れて行ったりエクストするなど、その生活は離島の小学生とは思えないものです。「智也にとって、僕が友だちみたいなものですから。学校から帰ったら今日の出来事を必ず聞くなり、やりたいことがあればやらせてあげたい」保戸島で生まれ育った公宏さんだからこそ、智也くんの気持ちを汲みとることができるといいます。

島の人たちとの交流は学校行事のほかに、加茂神社の夏季大祭も



あります。毎年7月に開催される祭り(今年は7日・8日)は、大漁や安全を祈願する神事や神輿を担ぎながら島内を練り歩いて海に入る「お祭り」が見物です。島を離れた人たちが帰省するため、大人の神輿も子どもの神輿も十分に担げるほどの人数が集まります。智也くんにとっては島の人も同年代の子どもたちとも触れ合える貴重な日です。

## 人口減少で生じた 深刻な空き家問題

保戸島では昭和40年代後半から、まぐろ漁船ではなく貨物船の乗組員として働く人が増えました。貨物船の終業時間には島へ渡る船便がなくて自宅へ帰れないことから、津久見市や白杵市、大分市に移り住むようになったといえます。「近くに引っ越した人たちはよく帰ってくる。うちの息子も家族で遊びにくるし、息子夫婦が忙しいときは私が孫の面倒を見に大分市に行くことがあるんですよ」と話すのは保戸島区長の高瀬清彦さん。

自身も昭和46年までまぐろ漁船に乗っていたといいますが、現在は海士と住宅の整理作業をしながら生計を立てています。4月から10月は潜りの時季で忙しく、ヒジキを鎌で刈り取ったり、伊勢海老を捕獲したりします。高瀬区長の悩みは、人口の減少が続く島で空き家が目立ちはじめたこと。コンクリート住宅を解体するには多額の費用がかかるため、空き家対策は家財道具を持ち出すにとどめています。今後は島民が意見を出しあいながら、課題を解決していくことになりそうです。

## 島を訪れるなら運動靴で 路地と階段を制覇せよ！

保戸島のように、日帰りできる船旅は休日のリフレッシュに最適です。津久見市中心部の港からは毎日往復12便が運航されていて、気軽に行き来できるのも魅力のひとつ。路地から顔をのぞかせる猫やレトロな意匠のタイルなどを見な

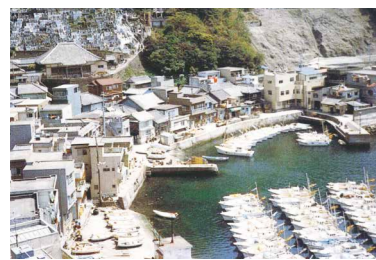
がらの島歩きは、やはり運動靴がおすすめです。所狭しと並ぶコンクリート住宅の間を階段で昇り降りしますが、普段の移動手段が車や自転車の人にとっては歩数が増えることに加えて高低差のある道るのが辛く感じるでしょう。島の年長者がひよいひよいと歩む姿を目の当たりにすると、自分の運動不足を痛感させられます。けれど、汗を流して膝が笑うほど歩いた後に頂上から眺める風景は素晴らしい、中腹にある徳門島大川の「ひゅうが井」を食せば何十段と昇降した階段のことはきれいに忘れられます。離島は不便だと切り捨てず、保戸島ならではの楽しみを見つけに行きませんか。



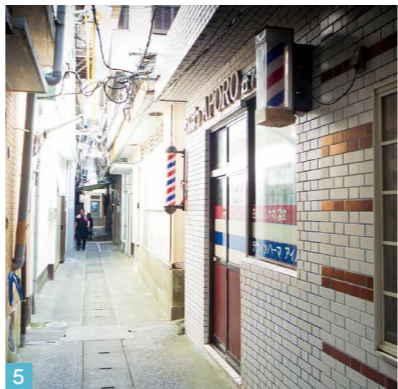
上の写真は昭和12年、下の写真は昭和53年撮影の漁港の様子。現在と見比べると、船の数や大きさが違うことがわかります。平成5年に大分県白津関地方振興局より発行された「保戸島—まぐろはえなわ漁業の歩み」を読むと、昭和8年から昭和18年までが第2期保戸島遠洋漁業の隆盛時代だったことがわかります。



春から初秋は潜りの時季で忙しいという高瀬区長。海上で目立つピンクの旗は、海士が乗船していることの目印です。



1 平成18年に津久見史談会より発行された「津久見史談10号」のなかでは、昭和10年代の夏季大祭の神輿について描かれています。「一夜泊まりの氏神様はアヨイヨイ、森の御殿にお帰りのヨオイヨイ、ヨイヤナーチッサーチョッサー」と神社の階段を上がり森の御殿に帰る島の夏祭りは終わる。2 2 漁港横で釣りを楽しむ島の人。島周辺では海士がサザエも収穫します。3 徳門島大川の「ひゅうが井」は、甘めの胡麻だれにまぐろをからませて味わいます。不定休のため、来店前には要確認 (tel.0972-87-2024) 4 狭い通路を歩き続けると、冒険しているようなワクワクした気持ちに。階段を昇りすすめ加茂神社の鳥居前からは漁港が見下ろせます。



取材日に集まってくださった島民のみなさん。撮影場所の漁港前は船の発着時に人の往来が増えます。